はじめに

中国に纏足という女性の足を人工的に小さくする風習があったことはよく知られている。その纏足が「三寸金蓮」などと呼ばれ、中国人男性によってもてはやされたことも、あるいは知られているかもしれない。もちろん、現在の中国にはこのような風習はもはやないのだが、この纏足というまことに奇妙な風習がどうして、どのようになくなったのかについては、実はあまり知られていない。この纏足の廃止に、ある英国人女性がきわめて重要な役割を果たしたという点になると、これはもう全くといってよいほど知られていない。

纏足に関する文献として日本でもっともよく知られているのは、岡本隆三の『纏足物語』（東方書店、一九八六年）であろうか。『纏足物語』は、纏足に関する百科事典という趣があり、纏足に関する岡本の蘊蓄が惜しみなく注がれている。「新月」「和弓」「竹萌」などの纏足の分類法、「嗅」

「吸」「嚙」といった纏足芸術、などなど。よくぞここまで調べたものだと、半ば呆れながら感心する。しかしながら、『纏足物語』を隅から隅まで読んでみても、纏足がどうして、どのようになくなったのかについてはほとんど分からない。本書が取り上げようとする反纏足運動を始めた英国人女性についても、全く触れられていない。

反纏足運動は一九世紀の末葉に始まるが、この運動に火を付け、中国各地に運動を広げるのに決定的に重要な役割を果たしたのが、後に詳しく紹介するリトル夫人 Mrs. Archibald Little（一八四五～一九二六年）という英国人女性であった。リトル夫人は、日本を旅行した時の旅行記が『日本奥地紀行』（一八八〇年。高梨健吉訳、平凡社東洋文庫、一九七三年／平凡社ライブラリー、二〇〇〇年）として翻訳されていることもあり、日本でもよく知られているイザベラ・バード Isabella Bird（一八三二～一九〇四年）の同時代人である。この二人は中国で少なくとも一度は出会っている。本書はリトル夫人を主人公とするが、リトル夫人の思想と行動を際だたせるために、時折イザベラ・バードにも登場願うつもりである。

さて、では一体どうして英国人女性が中国の風習である纏足を廃止する運動に重要な役割を果たすことになったのか。しかも、どうしてリトル夫人という女性がその役割を担うことになったのか。リトル夫人という英国人女性がこうした役割を担ったことにどのような意味があるのか。そもそもリトル夫人とは何者であり、中国とどのような関係があったのか。リトル夫人は中国をどう捉

え、どう理解した上で、反纏足運動に踏み切ったのか。リトル夫人の反纏足運動もまた、この当時よく見られた西洋世界の人間による未開・野蛮とされた非西洋世界の文明化、といった文脈で語られる問題であるのか。あるいは、もう少し複雑な西洋と東洋の関係を浮き彫りにできる問題であるのか。ここにジェンダーの問題がどう関わってくるのか。

本書は、こうした様々な疑問に答えようとするものである。本書の試みは、つまるところリトル夫人による纏足「発見」の物語を語ることになるだろう。いやもちろん、後に述べるように西洋においてもかなり古くから纏足については知られていた。しかしながら、リトル夫人こそは中国人女性にとってこの纏足がいかに重い意味を持っていたかを「発見」した女性である。「ヨーロッパ人は、纏足が中国にとって何を意味したのかを決して理解したことがなかった」(『スペクテイター』一八九八年三月一九日)というリトル夫人のせりふは、まさに「纏足の発見」者ならではのものなのである。

なお、本書で英国、イギリス、あるいは英国人、イギリス人という場合は、Britain, British を指している。近年英国、あるいはイギリスという概念の曖昧さ、怪しさが意識されてきているので、一言お断りしておく。